

仕事の足跡 : 高野信治先生業績目録

高野, 信治

<https://doi.org/10.15017/5068149>

出版情報 : 九州文化史研究所紀要. 65, pp.137-178, 2022-03-30. Manuscript Library, Historical Records Section, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

仕事の足跡

高野信治

本誌『九州文化史研究所紀要』は、九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門の成果公表の研究誌である。当部門の歴史については、秀村選三先生、丸山雍成先生、有馬学先生、吉田昌彦先生などが、それぞれのお立場で論じられている。私は本部門の前身に当たる文学部附属九州文化史研究施設の助手を一九八五年五月より一九八九年三月までの間、前任助手の柴多一雄先生の後任として務めた。その当時は、丸山先生のほかに、横山浩一先生と藤野保先生が専任教員として在籍されていた。また同じ助手の楠本美智子さん、事務官の長崎澤子さんの二人もおられ、私ども三人は、一室で仕事をしていた。このような私は、事務官も併任した助手であり、その感覚が現在まで強いためか、本部門の歴史について、大所高所から論じることは、能力的にも出来かねる。とはいえ、定年退職を迎え、本誌に何か書き残す機会を、与えていただいた。ほそほそと関わり続けたご褒美、とも思う。そこで、勝手ながら私のささやかな研究に関する仕事を中心に、適宜コメントをいれつつ、履歴も注記しながら、年表風に追うことで、退職の証しとしたい。

作成に当たっては、著書（単著、共編著、共著）、報告書（単著、共編著）、史料集（責任編集、校訂、解題など）、論文（研究ノート等を含む。全て単著）、小文（全て単著）、書評（同）、動向（同）、目録（全て共同作業）、事辞典（全て共著）、発表（研究会・学会などでの報告。全て単独）などに分類して記し、社会連携（講演と表記）や教育

など関連分（関連と表記）も組み込む。各事項の冒頭に「」印を付し、これらの分類を示した。

掲載した仕事や時々の履歴に関し、※（仕事）、@（履歴）の印で、注記した。また、年は年次で示し、全体を（1）～（6）の所属（履歴）の単位で区切った。

（1）九州大学大学院文学研究科時代

【一九八〇年】

〔発表〕「地方知行制の歴史的意義について——藩制確立期を中心にして——」一九八〇年度九州史学研究会大会

（九州大学文学部、一九八〇年一〇月二二日）

※『九州史学』71号（一九八一年）に報告要旨掲載。初めての学会報告。近世日本の「地方知行」という土地拝領形態の意義を全国的視野に留意し、大村藩、佐賀藩などを対象に論じた。当時の日本史学界では、かかる知行形態は米支給の形態（蔵米知行など）に変化するとのビジョンが有力だったが、実際には幕末まで存続する藩が、九州、東北諸藩に多い。私は地方知行制の研究を続けることになるが、かかるテーマに取り組むのは、周縁的と考えられる歴史事象にも着目したアプローチとして、極めてローカルな性格も併存する武士人格化研究やマイノリティの人のびとも広く視野に入れる障害史研究など、現在の私の研究テーマにつらなっていると思う。

@四月、九州大学大学院文学研究科（史学専攻）入学。

【一九八二年】

〔目録〕福岡市立歴史資料館編『福岡市歴史資料所在確認調査報告書』同資料館

〔目録〕豊前市教育委員会編『豊前市大富神社所蔵古文書目録』同委員会

〔目録〕九州大学文学部附属九州文化史研究施設編『九州文化史研究所所蔵古文書目録』十三 福岡県地価帳(一)』

同施設

〔目録〕九州大学文学部附属九州文化史研究施設編『九州文化史研究所所蔵古文書目録』十四 福岡県地価帳(二)』

同施設

※これらの目録類は院生としての資料整理参加による共同作業である。藤野先生、丸山先生が関わる仕事で、九州文化史研究施設の助手であった柴多先生、楠本さんが実質的な差配をされた。なお二人には崩し字読みで苦勞をおかけした。

〔一九八三年〕

〔論文〕佐賀藩における近世家臣団の創出過程——『朝鮮出兵』における鍋島氏軍事編成の分析を中心に——(『九州史学』76号、58～85頁)

※知行制と結びつく軍事編成の分析を、佐賀藩を対象に試みる。知行と軍事へ関心は、軍制に組み込まれつつも、平時が続く近世武士の本質への興味へ繋がる。

〔発表〕「藩体制の確立と構造——地方知行制の評価をめぐって——」第22回近世史サマーセミナー(福岡市・志賀島苑、一九八三年七月二三日)

※『九州史学』77号(一九八三年)に報告要旨掲載。内容については厳しく批判されたが、多数の質問に、「地方知行」への関心の高さを実感した。

〔発表〕「佐賀藩の大身家臣と郡代制」社会経済史学会九州支部会(福岡大学、一九八三年一〇月三一日)

※佐賀藩は大身家臣がいわば割拠する独自の藩領で、これらの階層が藩統治行政へどのように関わるのかを主

題にした。のちに「給人領主」とシエーマ化する階層が藩の公的支配システムにいかに関わり込まれているのか、重要な問題と考えていた。

【一九八四年】

〔論文〕「佐賀藩家臣団の編成と構成 ——『与着到』の分析を中心として——」（藤野保編『九州近世史研究叢書』第2巻 国書刊行会、357～419頁）

※本叢書は既発表論文の集成だが、依頼された新規論文として、真栄平房昭氏の論文とともに掲載された。

〔発表〕「佐賀藩の陪臣組織について」一九八四年度九州史学会大会（九州大学、一九八四年二月九日）

※地方知行を採る藩での陪臣研究はあまりなかったが、在地性が強い陪臣のあり方に、兵農の関係を考えさせる契機となった。のちに対馬藩をめぐる、「給人地主」「扶持人」などの概念化も試みる。

（2）九州文化史研究施設時代

【一九八五年】

〔論文〕「成立期佐賀藩における家臣団編成の原理と構造 ——『与私』・『備』体制の成立を中心として——」（『九州史学』82号、21～48頁）

〔小文〕「天領の成立と構造」（西日本新聞夕刊、一九八五年八月一七日）

※「藩・天領の成立と構造」が正しいが、リード誤植のまま掲載された。

@五月、九州大学文学部附属九州文化史研究施設助手。九州大学七五年史編集室講師に昇任された柴多先生（前任助手）へ、不慣れな私は連日のように電話して教示いただいた。毎度の的確なアドバイスは、基礎研究を

大事にされる先生の姿勢に通じるものを感じた。

【一九八六年】

〔論文〕「佐賀藩家臣団編成の諸段階」〔『史淵』123輯、61～102頁〕

※当時は家臣団編成研究の意味を十分に考慮しないままだったが、長い時間軸で観察することの大切さは強く意識した。

〔論文〕「幕末期における佐賀藩家臣団の構造」〔九州文化史研究所紀要』31号、391～442頁〕

※家臣在郷の実態と藩の調査による権力強化の意図を明らかにしようとした。薩摩藩や長州藩・高知藩など明治国家の成立に相応に関わる諸藩は、地方知行、家臣在郷の特質を多かれ少なかれ持ち合わせている。ただし、佐賀藩も含め、いわば古さ（地方知行や家臣在郷は遅れた古い体制、との考え方が強かった）と新しさ（西欧の軍事、科学技術への着目や殖産興業への志向性）の関係につき、自分なりの回答を出せないまま現在に至る。藤野保編『続佐賀藩の総合研究』吉川弘文館、一九八七年に再録されたが、この掲載を編者の藤野先生に感謝しつつも、今となっては時期尚早であったとの感も抱く。

【一九八七年】

〔論文〕「佐賀藩における政治思想と政治形態」〔九州文化史研究所紀要』32号、259～292頁〕

〔論文〕「財政危機の進行」〔藤野保編『続佐賀藩の総合研究』吉川弘文館、523～559頁〕

※これら二論文は、佐賀藩の文化文政期の分析を試みたものだが、いわゆる雄藩が行ったとされる天保改革の必然化を説明しようという課題意識が強く、同時代の問題として様々に見落とした分もあると考える。

〔小文〕「藩・天領の成立と構造」・「略年表」〔横山浩一・藤野保共編『九州と日本社会の形成』吉川弘文館、178～182

頁・349～386頁〕

※前出の新聞記事掲載分をもとにした内容で、編者の両先生の要請で、古代から近現代までの略年表も作成した。年表作成作業は、長い時間軸での歴史観察の意義を教えてくださいました覚えがあるが、今から考えると、採録事項の選択は難しく冷や汗ものだ。

〔目録〕 山口県教育委員会文化課編『下田万村庄屋大谷家歴史資料目録』山口県教育委員会

〔一九八八年〕

〔論文〕「近世大名の『御家』について ——『公儀』と『御家』観念の成立、竜造寺・鍋島佐賀藩を素材に——」〔九州文化史研究所紀要〕33号、1～41頁

※領主交代（竜造寺氏から鍋島氏）という特殊な歴史過程のなか、大名家という武家集団に、どのように「御家」という帰属意識が醸成されるのかを、考えた。近世大名の場合、自生的というよりも外在的要因（ないし中央権力との関係における政治的な危機認識）が主要な契機と捉えた。

〔論文〕「近世中期地方知行（給人知行）に関する一考察 ——佐賀藩『切地』・『上支配』政策の分析を中心に——」〔史淵〕125輯、43～81頁

※地方知行が変容しながらも存続する歴史的背景を考えようとした。

〔事辞典〕川添昭二他編『角川日本地名大辞典 40 福岡県』角川書店

※遠賀郡、山田市などを担当した。平凡社版の地名辞典でも遠賀郡を担当したが、同郡域は、のちに私に主要な研究テーマを与えてくれた知的障害の子供と、今までしばしばドライブをしてきた。「赤いでつかい橋」〔若戸大橋〕が好きで、遠賀郡域の変貌を、三十年余り見てきたことになる。

〔目録〕福岡県立図書館編『昭和六一・六二年度 古文書調査報告書第十二集 大友・立花文書』福岡県教育委員会

〔目録〕九州大学文学部附属九州文化史研究施設編『九州文化史研究所所蔵古文書目録 十六 有松家文書』同施設

(3) 福岡工業大学時代

【一九八九年】

〔論文〕「給人領主と農耕祈願 —— 佐賀藩神代鍋島領における災害除祈願の分析を素材に——」(『九州文化史研究 所紀要』34号、131～164頁)

※この論文は、私にとっては、民俗学的な観点を取り入れたエポックメイキングな内容である。武家領主(士)と百姓(民)の関係を、「心意統治」という枠組みでみようとしたもので、文化人類学、宗教学など他分野の撰取も心がけるようになる。かかる方法論は、のち、武士神格化の研究へ継承。また、「給人領主」という概念を提示し、地方知行の給人(家臣)のうち、知行地支配の権限が強い階層をシェーマ化した。なおこのような学際的な方法論や知行制への関心は、東京教育大学で和歌森太郎氏・桜井徳太郎氏による民俗学・民間信仰論の影響をうけつつ盛岡藩研究をされていた、加藤章先生の薫陶によるものである。

〔動向〕「九州・鎮西・対馬」(村上直編『日本近世史研究事典』東京堂出版)

〔目録〕大阪経済大学日本経済史研究所編『経済史文献解題 一九八八年版』清文堂出版

④四月、福岡工業大学工学部助教教授(一般教育担当)

【一九九〇年】

〔論文〕「知行地陪臣の『吟味』について —— 知行地における行政的意思決定に関する一考察、佐賀藩神代鍋島領を素材に——」(九州大学国史学研究室編『近世 近代史論集』吉川弘文館、345～371頁)

〔論文〕「知行地の年中行事 —— 佐賀藩神代鍋島氏の『日記』を中心に——」(『福岡工業大学研究論集』23巻1号、1～21頁)

※これらの二論文も地方知行研究の一環で、前者は知行地支配の実態解明、後者は学際的手法を取り入れた試みである。

〔目録〕藤野保編『九州近世史研究叢書 15 解説・文献目録』国書刊行会

※九州近世史関連の研究文献目録を、柴多一雄先生、真栄平房昭氏の三名分担で調査、作成した。データの悉皆収集の難しさと大変さを思い知るが、後にこの時のような経験を、繰り返すことになる。

〔一九九一年〕

〔報告書〕『障子ヶ岳城趾調査報告書』（共著。福岡県勝山町文化財調査報告書第4集、勝山町教育委員会、113頁）

※同城は毛利氏が戦国期に関わる城だが、『萩藩閩閩録』の関連記事の現代語訳をしたのは閉口した。なお、勝山町（現みやこ町）の町史編纂にも、関わることになったが、細川・小笠原両時代の小倉藩閩閩史料に触れる機会となったのはよかった。

〔論文〕「給人領主の知行地『御下』について——佐賀藩神代鍋島氏を素材に——」（『福岡工業大学研究論集』24巻1号）

〔書評〕「新刊紹介・檜垣元吉著『九州北部諸藩史の研究』九州大学出版会」（『史学雑誌』第100編7号、99～100頁）

※私にとり初めての書評だが、簡単な内容の紹介に止まった。しかし、このうち、依頼された書評原稿はできる限り応じてきた。論文などの執筆よりしんどかったが、文字通り、様々な方々の問題意識や研究方法を学び、それらをまとめて、後年（二〇一七年）、単著も編んだ。

〔発表〕「近世日本における国家・領主・民衆——とくに『心意統治』の問題を中心として——」第47回九州歴史科学研究例会（西南学院大学、一九九一年六月二二日）

①一〇月、九州大学教養部助教授。先に着任されていた吉田昌彦先生からは、我々は大きな組織（九大）に属

するものの、各人は「個人店主」のようなものであり、開発商品が売れなければ取り残される、という主旨のアドバイスをいただいた。果せるものではなかったが、その後の導の糸となった。

(4) 九州大学教養部時代

〔一九九二年〕

〔論文〕「給人刑罰権に関する一考察 —— 佐賀藩神代鍋島氏を素材に ——」（『日本歴史』535号、40～57頁）

※地方知行の家臣（給人）が、一定の刑罰の行使権限を独自に持っている事実を紹介した。この時期の地方知行に関する仕事は、佐賀藩の上層家臣に相当する神代鍋島氏の日記を中心に行っている。ちなみに旧神代鍋島領（雲仙市国見町）は藤野保先生出自の地である。日記には佐賀城下での日記と知行地での日記があり、実務に従事する陪臣（神代鍋島氏の家臣）による記録と考えられる。この日記により、様々なことを学び論じてきた。ただし、現段階で思えば、事実の面白さに興味が引かれ、その事象の持つ意味の掘り下げた考察が必要だろう。例えばこの刑罰の問題も、大名・藩の制度のなかでの位置づけ、いわば仕置権の重層構造の問題として、さらに深めるべきであった。ともあれ、このような日記分析に導いて下さった藤野先生には感謝するばかりである。

〔目録〕福岡県立図書館編『昭和六三～平成三年度 福岡県古文書調査報告書 第十三集 近世海運関係資料調査』

福岡県教育委員会

〔一九九三年〕

〔史料集〕『佐賀県近世史料』第一編（佐賀本藩編）第一卷（分担執筆。佐賀県立図書館編刊、923頁）

仕事の足跡

※本史料集は、『佐賀県史料集成 古文書編』（全30巻）に続くシリーズとして開始され、現在も継続中（毎年1冊刊行）。私はのちに、編集委員として、第八編（思想・文化編）、第十編（宗教編）の責任編集、校訂、解題などを担当することになる。

〔論文〕「給人知行地における巡見使迎接をめぐる一考察 —— 佐賀藩を素材に ——」（藤野保先生還暦記念会編『近世日本の社会と流通』雄山閣、153～171頁）

〔小文〕「三つの『御下』 —— 給人領主と知行地との関係をめぐる覚書、鍋島佐賀藩を素材に ——」（『九州歴史科学』21号、1～6頁）

〔目録〕福岡市教育委員会編『東長寺収蔵品目録』同委員会

〔発表〕「佐賀藩における給人領主制」第38回国際東方学者会議東京会議（文部省教育会館、一九九三年五月一六日）

〔講演〕「鍋島猫化騒動と葉隠」企画展「武家の世界」講演会（北九州市立歴史博物館、一九九三年六月二六日）

〔関連〕「六本松今昔物語」（『九大教養部報』114号）

②「近世地方知行制の比較史的研究」科研・基盤研究（C）（代表。一九九三～一九九四年度）

（5）大学院比較社会文化研究科時代

〔一九九四年〕

〔史料集〕『佐賀県近世史料』第一編第二巻（分担執筆。佐賀県立図書館編刊、836頁）

〔論文〕「佐賀藩における給人領主制」（『歴史学・地理学年報』18号、21～36頁）

〔目録〕福岡県立図書館編『福岡県立図書館収集文書目録 第四輯』同館

〔講演〕「神代鍋島家文書」平成六年度古文書解読講習会（長崎県立長崎図書館、一九九四年七月二七日）

④四月、改組により大学院比較社会文化研究科助教

〔一九九五年〕

〔報告書〕『近世地方知行制の比較的研究』（単著。平成五・六年度科学研究費補助金・一般研究（C）・代表者高

野信治、成果報告書、13頁）

〔論文〕「給人領主家の『死』をめぐる儀礼——鍋島佐賀藩を素材として——」（『歴史学研究』669号、1～19頁）

〔論文〕「近世日本における『国家』・『家』・領主制——給人領主制の観点から——」（『歴史学研究』677号、83～92頁）

〔小文〕「地方知行制下の刑罰権（神代鍋島家）」（『古文書の研究』33号）

〔目録〕福岡藩政史研究会編（代表・中村質）『斎藤家文書』福岡市委員会

〔発表〕「近世日本における『国家』・『家』・領主制——給人領主制の観点から——」（一九九五年度歴史学研究大会

近世史部会（学習院大学、一九九五年五月二八日）

※本発表は歴史学研究大会近世史部会での依頼報告である。近世史研究のなかで、地方知行が持つ意味を、国家論、武士論と関連させながら論じようとしたものである。鋭い質問にはタジタジであったが、佐々木潤之介氏から、やり取りの最後に「面白かった」といつてもらった一言には、テーマ研究の継続性とフィールドへのこだわりの大事さを教えられた思いである。

〔講演〕「平戸藩の藩政史料」平成七年度古文書解読講習会（長崎県立長崎図書館、一九九五年八月二日）

〔関連〕「丸山先生の学士院賞受賞をお祝いする」（九州大学全学共通教育広報『radix』3号）

⑤学位請求論文「近世大名家臣団の研究——鍋島佐賀藩を素材に——」633頁、博士（文学）取得（九州大学、

文博乙138号、一九九五年二月）。主査は丸山雍成先生にお願いした。

〔一九九六年〕

〔論文〕「近世琉球地頭制に関する一考察」（丸山雍成編『前近代における南西諸島と九州』多賀出版、255～279頁）

※諸藩の給人制との比較から、琉球地頭制の性格を捉えられないのか。いわば、同一の地平で、両者を論じることが目指す一文だが、検討すべきことが不消化で、悔いが残り、今後考えられる機会を目指したい。

〔論文〕「地方知行と近世的秩序」（山本博文編『新しい近世史 Ⅰ 国家と秩序』新人物往来社、309～350頁）

※本論文も地方知行を、近世日本の全体史のなかで位置づけるのを目指したが、成功しているとは言い難い。

〔論文〕「『葉隠』に関する一考察 —— その思想形成の諸契機をめぐって ——」（『九州文化史研究所紀要』40号、87～115頁）

※私の研究テーマの一つは武士論だが、近世の武士道書として著名な『葉隠』について、内容を語ったとされる山本常朝（佐賀藩家臣）の様々な葛藤の所産ではないのか、という視角から論じたもの。佐賀藩が領主交代により成立したこと、複雑な思いを抱かざるを得ない主君への忠の向け方のこと、自身が商家養子とされそうになったこと、現状の武士への失望、などが背景となつて強烈な主従意識が表出されたのではないのか、という見方である。ある思想は、それを生み出した本人の現実を知らないでは語られまい。

〔動向〕「一九九五年歴史学会回顧と展望 日本・近世 身分制」（『史学雑誌』第105編5号、118～120頁）

〔目録〕福岡県立図書館編『平成五年～七年度 福岡県古文書調査報告書第十四集 近世有明海沿岸干拓資料調査』

福岡県教育委員会

〔目録〕九州大学附属図書館六本松分館編『檜垣文庫目録』全5冊

※本目録は、九大教養部の教員だった檜垣元吉先生が収集された多数の資料がご遺族より六本松分館に寄贈され、これらを吉田昌彦先生が中心になつて整理し、なつたものである。吉田先生の献身的な尽力がなければ、

整理は未完だったろう。

〔講演〕「異文化への眼差し」平成八年度古文書解読講習会（長崎県立長崎図書館、一九九六年七月三一日）

※長崎県立図書館が主催した古文書講習会では、毎回、特定のテーマを設けて取り組んだ。テーマに即した史料選択は難しかったが、個人的には面白くやらせていただいた。

〔一九九七年〕

〔単著〕『近世大名家臣団と領主制』（吉川弘文館、433頁）

※最初の単著。神代鍋島領の分析を中心に、『葉隠』、「御家」観念など、思想的なテーマも含めた内容で、フィールドは佐賀藩である。特殊と普遍、地域と国家など、多元的な歴史要素を、どのような関係として捉えたらよいのか、考えさせられたが、そのような思いは現在に至るも同じだ。

〔論文〕「増穂残口の対外観——近世中期の自民族中心意識の複合性——」（中村質編『開国と近代化』吉川弘文館、2～25頁）

※対外観についての論考だが、これは、異人・被差別民・障害者など、近世日本でマイノリティとされる人びとへの眼差し、というものを私なりに意識した論考である。障害者の親となったことが反映しており、このころから、マイノリティとされる人びとへの関心が深くなっていく。

〔論文〕「給人多久氏夫妻の知行地入部——武家の妻と主従制・領主制——」（『西南地域史研究』12輯、1～33頁）

※障害への関心は、生む性としての女性への関心にも繋がっていく。本論ではそのような女性を、これまで行ってきた、知行制や武士の家の問題とリンクさせ、考えようと試みた。

〔動向〕「地方史研究の現状・佐賀県・近世」（『日本歴史』588号、47～57頁）

〔事辞典〕日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』山川出版社

〔発表〕「自己意識と他者認識 —— 近世日本における『夷狄』・『異端』・『片輪愚昧』の創出——」一九九七年度九州史学会公開講演（九州大学、一九九七年二月一三日）

※これも、増穂残口の対外観をめぐる論文と、問題意識は同じである。

〔関連〕「苦学遊学雑記」（九州大学比較社会文化研究科『Cross over』6号）

※東京大学史料編纂所（一九九七年度）に内地留学した際の書き物。

@一九九七年九月から半年間、東京大学史料編纂所へ内地留学。受入教員は山本博文氏。史料編纂所がいかに史料収集の面で恵まれた環境にあるのかを思い知らされ、福岡とは別世界の感覚だった。なお山本氏の史料編纂所教授十年評価を、のちに、掘新氏とともに担当した。

【一九九八年】

〔論文〕「近世知行観に関する一考察 —— 対馬藩を素材に——」（『日本歴史』604号、1～17頁）

〔論文〕「給人・地主・役人 —— 近世地域社会の「中間層」、対馬藩を素材に——」（丸山雍成編『日本近世の地域社会論』文献出版、139～162頁）

※この二論考は、ともに対馬藩を対象にしたもので、自作経営する給人を「給人地主」と概念化することになる。「給人領主」とならぶ、給人（知行拝領家臣）のパターン概念の一つと考えての提案である。

〔小文〕「武士への眼差し」（『柳川資料集 月報』3、3～6頁）

※この時、一緒に執筆した藤井讓治氏は柳川市史に関わる論考だったが、私はそうではないアウトなテーマで、歴史研究者としての資質の差を改めて感じさせられた。ただし、このような「武士」に対する同時代的な認識の析出は、日本近世の政治社会の性格を考える上で大事な問題とも考えている。

〔小文〕「あすなろ」報告 —— 「給人地主制」論の観点から——」（『岡山藩研究』第29号、1～7頁）

〔書評〕「書評・村田路人著『近世広域支配の研究』大阪大学出版会」(『歴史評論』582号、30～34頁)

※日頃の研究対象とは違う、幕府領や領主支配地が入り組んだ地域の研究書で、かかる地域における幕府の広域支配のあり方をめぐるコメントは、当方の守備範囲をこえるものだ。しかし、私が対象にしてきた一円的な藩領が、日本近世では一つの領域形態に過ぎない、との感覚を持てたのは収穫だった。

〔発表〕「藩政と地域社会」一九九八年度岡山藩研究会全体会報告(早稲田大学、一九九八年七月一日)

〔講演〕「虚像のなかの実像——鍋島猫化け騒動の世界から——」平成一〇年度九州大学大学院比較社会文化研究

科公開講座(九州大学比較社会文化研究科、一九九八年一月七日)

@猫化け騒動、化け猫騒動とされるものは、全国的に数種あるようだが、鍋島物は比較的有名だろう。ただこのような虚像が生まれる背景も考えるべきとの立場である。

〔一九九九年〕

〔共編著〕『近世社会と知行制』(モリス、J. F.・白川部達夫との共編。思文閣出版、375頁)

〔論文〕「給人地主制論の試み——対馬藩を素材として——」(モリス、J. F.・白川部達夫との共編『近世社会と

知行制』思文閣出版、59～83頁)

※日頃のフィールドは異なるものの、近世知行制に関心を持つ、モリス氏、白川部氏との共編で刊行した本に、「給人地主」という概念を改めて提示した。

〔論文〕「藩領支配の地域性——佐賀藩を素材として——」(『比較社会文化』第5巻、17～36頁)

〔論文〕「初期大名権力と財政運用形態——竜造寺・鍋島佐賀藩を素材として——」(『九州文化史研究所紀要』42・

43合併号、49～92頁)

※この二論文は、学位請求論文の内容を刊行したものである。

〔小文〕「時代の変化と地域性」(『多久古文書の村・村だより』17号、3～4頁)

〔小文〕「長崎道の宿場」(児玉幸多編『日本史小百科 宿場』、東京堂出版、252～256頁)

〔小文〕「九州路の宿場」(児玉幸多編『日本史小百科 宿場』、東京堂出版、257～259頁)

※かかる交通史、情報論のテーマは、のちに博論審査の主査を務める守友隆氏(現・北九州市立いのちのたび博物館)が担うことになる。

〔事辞典〕石上英一他編『岩波日本史辞典』岩波書店

〔発表〕「近世『日本人』像に関する一考察」九州史学研究会近現代史部会・統一テーマ／国民国家論の現在(九州大学、一九九九年七月一〇日)

〔講演〕「古文書分析の方法——「史料」から「史実」を読み解くアウトロー編——」(福岡県立図書館、一九九九年二月八日)

(6) 大学院比較社会文化研究院時代

二〇〇〇年

〔論文〕「藩政と地域社会——給人地主制論の観点から、対馬藩を素材に——」(『歴史学研究』733号、1～18頁)

※対馬藩を題材にしてシェアマ化した給人地主論の、私にとっては、集大成である。近世日本は兵農分離社会とされながら、村落に在郷しつつ地域と関わりを持つ存在は例外的という、いわば思考停止ではなく、それらも組み込んだ近世政治社会像が必要だろう。

〔書評〕「書評・長谷川成一著『近世国家と東北大名』吉川弘文館」(『日本史研究』450号、61～68頁)

※東北には、地方知行を採る藩が多いが、対象本は蝦夷地を契機とした対外的事象も視野に論じられたもので、東北に対する別の視角を得られた印象である。

〔書評〕「書評・福田千鶴著『幕藩制的秩序と御家騒動』校倉書房」〔『歴史評論』608号、83～88頁）

※御家騒動は際物めいた事象として語られてきたと思うが、本書はこれを幕藩制、近世国家のあり方を析出する場として、斬新で論理的な議論を展開しておりインパクトを感じた。

〔事辞典〕加藤友康他編『日本史文献解題辞典』吉川弘文館

〔事辞典〕朝尾直弘他責任編集『日本歴史大事典』小学館

〔講演〕「荒波のなかに生きる——鍋島三代——」佐賀ふるさと学セミナー・ミレニアム特別企画『波濤——佐賀と近世——』（佐賀県立生涯学習センター、二〇〇〇年六月八日）

〔講演〕「伝承と歴史——久留米松崎藩の成立と廃藩——」第9回「小郡・歴史発見」文化講演会（福岡県小郡市七夕会館ホール、二〇〇〇年一〇月二八日）

④四月、改組により大学院比較社会文化研究院助教授（大学院比較社会文化学府〔修士・博士課程〕担当）

二〇〇一年

〔論文〕「佐賀藩における初期代官・郡代制」（『西南地域史研究』13輯、111～144頁）

※これも、学位請求論文の公刊。

〔小文〕「『共生』の可能性——日本近世史から——」（『九州歴史科学』第29号、98～102頁）

〔書評〕「書評・根岸茂夫著『近世武家社会の形成と構造』吉川弘文館」（『九州史学』133号、45～53頁）

〔事辞典〕藤野保編集代表『日本史事典』朝倉書店

〔目録〕福岡県立図書館編『平成八年～十二年度 福岡県古文書調査報告書第十五集 筑後川流域利水関係史料調

査』福岡県教育委員会

〔発表〕「共生」の可能性——日本近世史から——九州歴史科学研究会シンポジウム 統一テーマ／グローバル
リゼーション・地域・共生（西南学院大学、二〇〇一年三月三日）

〔発表〕「武・徳・天照——広島藩儒者堀景山の君主論をめぐって——」二〇〇一年度七隈史学会（福岡大学、二〇〇一年九月二十九日）

※怠慢からこの発表の論文化には、現在まで至っていないが、朱子学者ながら国学者的な発想も持つ人物であり、武士論や社会論も射程にしており興味深い。

〔講演〕「鍋島猫化け騒動の世界」大川歴史講座（福岡県大川市旧吉原家住宅、二〇〇一年一〇月二〇日）

〔講演〕「近世の大名家について——鍋島・有馬・立花各家の事例から——」ふるさと歴史講座（福岡県山門郡大和町中央公民館、二〇〇一年一月一〇日）

※大名家については、学位審査で主査を務めた野口朋隆氏（現・昭和女子大学）が斯界をリードすることになる。

@「民俗神や民族神との関係分析を通じた近世武家権力神の基礎的研究」科研・基盤研究（C）（代表。二〇〇一～二〇〇四年度）

〔11001年〕

〔単著〕『藩国と藩輔の構図』（名著出版、606頁）

※大名・藩の徳川氏・幕府に対する自立性と輔翼性を、「藩国（ハンコク）」と「藩輔（ハンボ）」という二つの儒学用語で象徴化した。それまで、幕府に対し藩は従属的か自立的かという、二項対立的な捉え方がなされる傾向が強かったが、かかる性格を藩は併有し、時期によりその関係が変化するとの見方だ。

〔論文〕「鍋島光茂像の側面——『葉隠』にみる批判的眼差しをめぐって——」（『葉隠研究』43号、12～18頁）

〔書評〕「書評・都城市史編さん委員会編『都城市史 史料編 近世1』都城市」（『地方史研究』298号、108～111頁）

※博論審査で主査を務めた山下真一氏（現・都城市島津邸）の依頼で執筆。

〔講演〕「近世武士と佐賀藩葉隠」大川市民大学講座（大川市文化センター小ホール、二〇〇二年二月一六日）

〔講演〕「共生の可能性——日本近世の勤労観と障害者——」早良の歴史と自然を探る会四月例会（福岡市早良区

田隈公民館、二〇〇二年三月三一日）

〔講演〕「『日本人』像の形成とマイノリティ」福岡市立中央養護学校同和研修会（福岡市立発達教育センター、二〇〇二年七月二二日）

※この二講演は、いずれも日本近世の障害の認識や実態について、政治社会論の枠組みで広角の立場から考えようとしたものだ。ただ、養護学校（特別支援学校）の先生方を前にいささか緊張した。

〔関連〕「歴史認識の「越境」行為を指して」（九州大学研究紹介編集委員会編『九州大学研究紹介』No.19）

二〇〇三年

〔共著〕『小郡市史』第二卷（小郡市史編集委員会編、福岡県小郡市、373～429頁担当）

※福岡県小郡市域は旧久留米藩の北西辺に相当し、支藩松崎藩が一時存在、また、西側は佐賀藩や対馬藩田代領なども接し、水利をめぐる問題も生じるなど、領域錯綜ながら生活圏としての一体性がある。かつ、薩摩街道（松崎街道）も通貫する。のちに、隣接する鳥栖市史（佐賀県）編纂にも関わることになり、佐賀藩東部や田代領を見てきたため、改めてこれらの地域の一体的かつ個人的な特徴を、考えなければいけないと感じる。

〔論文〕「武士人格化一覽・稿——上・東日本編——」（『九州文化史研究所紀要』47号、1～105頁）

※武士神格化の科研の第一成果に相当する。

〔論文〕「『葉隠』思想の形成をめぐって」〔『葉隠研究』50号、34～45頁〕

〔論文〕「支配の形態と民意の行方」〔近世史サマフォーラム二〇〇三実行委員会編『近世史サマフォーラム二〇〇三の記録』同会、18～31頁〕

〔小文〕「佐賀藩と対馬藩田代領——支配制度の違い——」〔『栖（すみか）』43号、48～55頁〕

※上記の論文と小文は、鳥栖市史編纂の成果で、佐賀藩と対馬藩飛び地肥前田代領の支配形態や制度の相違を、比較史的に考えた仕事である。

〔書評〕「書評と紹介・北島万次著『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』校倉書房」〔『日本歴史』667号、104～107頁〕

※私の第一論文は朝鮮出兵（壬申倭乱）に参陣した大名家臣の分析だったが、この方面の仕事から遠ざかって、いるのを自覚させられた。

〔動向〕「自著紹介・『藩国と藩輔の構図』」（九州大学付属図書館報『図書館情報』38―3）

〔動向〕「タイ王国踏査旅行」〔『21世紀COEプログラム・東アジアと日本…交流と変容・ニューズレター』3号、8～10頁〕

※当時関わっていた、日本、中国、韓国、韓国の院生諸氏とともに行った旅行記である。

〔事辞典〕丸山雍成他編『日本交通史辞典』吉川弘文館

〔事辞典〕黒田日出男他編『日本史文献事典』弘文堂

〔発表〕「支配の形態と民意の行方」近世史サマフォーラム二〇〇三（京都キャンパスプラザ、二〇〇三年八月二三日）

〔講演〕「鍋島猫化け騒動の世界——「元茂公御年譜」との関連にもふれて——」小城ふるさと学特別講座（小城町

立歴史資料館、二〇〇三年三月九日)

〔講演〕「『葉隠』思想の形成をめぐって」二〇〇三年度葉隠研究会記念講演(メートプラザ佐賀、二〇〇三年六月一日)

〔講演〕「江戸時代の武士像をめぐって——長崎の町人学者・西川如見の見方——」長崎県教育委員会研修講座(長

崎県立長崎図書館、二〇〇三年九月二十九日)

※武士像、武士への眼差し、このようなテーマは、機会あるごとに考えているが、なかなか公刊が難しい。

〔講演〕「日本近世庶民旅行の記録——九州大学所蔵史料から——」平成一五年度九州大学大学院人文科学研究

公開講座・歴史資料を読む、日本と世界の文書・写本(九州大学21世紀交流プラザ、二〇〇三年十一月一日)

〔講演〕「佐賀藩と対馬藩田代領——支配制度の違い——」第42回鳥栖市市民文化祭・文化講演会(鳥栖市中央公

民館、二〇〇三年十一月三日)

〔二〇〇四年〕

〔小文〕「『共生』についての雑感」(『比文創立十周年記念文集』九州大学大学院比較社会文化学府・研究院)

〔小文〕「幕末期毛利家の自己認識と改革意識」(『山口県史の窓』史料編・幕末維新2、5～8頁)

※「西南雄藩」などと、一括りにはできない大名家の動向が、鍋島家を念頭に感じられる。

〔書評〕「書評と紹介・磯田道史著『近世大名家臣団の社会構造』東京大学出版会」(『日本歴史』676号、112～115頁)

※いわば家臣個人のライフサイクルまで視野に入れた分析の精緻さには圧倒され、同じく家臣団に興味を持ちつつも、自身の研究関心の底の浅さを痛感した。

〔書評〕「新刊紹介・藤井讓治編『彦根藩の藩政機構』サンライズ出版」(『日本史研究』507号、92～93頁)

※同じく、藩政機構の精緻なデータ化に、このような基本的な作業の大切さが思い知らされる。意外に藩政機構の基礎的な仕事は少ない。のちに大村市史編纂で、肥前大村藩を対象にそれに近いことをやったが、復元

の難しさを感じた。

〔動向〕「コメント」『前近代日本の史料遺産プロジェクト 研究会報告集 二〇〇三』（東京大学史料編纂所、230頁）

〔事辞典〕有馬学監修・共編『日本歴史地名大系 41 福岡県』平凡社

〔講演〕「江戸時代人の武士像」瀬高町歴史講演会（瀬高町立図書館、二〇〇四年一月二四日）

二〇〇五年

〔報告書〕『民俗神や民族神との関係分析を通じた近世武家権力神に関する基礎的研究』（単著。平成一三～一六年度

科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）・代表者高野信治、成果報告書、205頁）

※武士神格化の研究は、その後も断続的に継続し、現在に至る。

〔史料集〕『鳥栖市誌資料集 第8集 対馬藩田代領関係文書1』（校訂・解題。鳥栖市誌編纂委員会編、鳥栖市、213頁）

※本史料集は諸事情で「1」のみの刊行だが、別に関わっている佐賀県近世史料編纂にて、対馬藩を取り上げる予定で、実質的な「2」の史料集になろうと考える。

〔論文〕「地域の中で神になる武士たち ——「武士神格化一覧・稿」の作成を通して——」（『比較社会文化』第11巻、

51～60頁）

※のちに、武士祭神の統計をとって明らかになったが、このテーマにとり、「地域」は重要な視角だ。しかし、この時点では、そこまでの自覚はなかった。

〔論文〕「武士神格化一覧・稿 ——下・西日本編——」（『九州文化史研究所紀要』48号、1～165頁）

〔論文〕「武士神格化と伝承の共有化 ——「武士神格化一覧・稿」の作成を通して——」（『九州文化史研究所紀要』

48号、167～192頁）

〔目録〕九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）『スタンフォード大学フーバー研究所所蔵日本関係史料目録』

第3ユニット

〔目録〕佐賀大学文系基礎学プロジェクト『小城鍋島家文庫目録近代文書編』佐賀大学付属図書館

※同大学の小城鍋島家文庫は、佐賀藩研究にとり、重要な史料群だが、その近代部分の調査を、飯塚一幸氏

（現・大阪大学）とともに行った。

〔関連〕「序」（内山幹生著・嶋谷力夫校訂『肥後宇土郡亀尾村御新地方記録全釈』熊本県宇城市教育委員会）

※主査として博論審査に当たった内山幹生氏は現在も同地域を中心に研究を続ける。

@四月、同大学比較社会文化研究院教授昇任

二〇〇六年

〔共著〕『勝山町史』上巻（勝山町史編纂委員会編、福岡県京都郡勝山町、579～663頁）

〔論文〕「近世初期大名の農政と地域社会——細川小倉藩の場合——」（『九州文化史研究所紀要』49号、1～38頁）

※共著書で対象とする勝山町域（現みやこ町）は小倉藩南部にあたる。ここでは、社会的な差別を受けた人びとにも焦点を当てたが、これはのちの科研テーマである障害史研究にも繋がる。論文も同じような視角をもつて臨んだ。

〔論文〕「『藩』研究のビジョンをめぐる」（『歴史評論』67号、2～13頁）

※藩研究は様々な立場からなされてきたが、岡山藩、松代藩、尾張藩などの共同研究で提唱されていた、藩世界、藩地域、尾張藩社会などの概念化の有効性も視野に、論じた。

〔小文〕「映画・歌舞伎・伝承・史実——有馬猫騷動をめぐる——」（『福岡県史だより』122号、4～6頁）

※小郡市史編纂に関わった知見をもとに、久留米藩の猫化け騷動「有馬猫騷動」をめぐる、瞥見した。

〔書評〕「書評と紹介・谷口眞子著『近世社会と法規範』吉川弘文館」（『日本歴史』701号、120～122頁）

〔動向〕「歴史学研究会大会近世史部会報告批判」(『歴史学研究』822号、42～44頁)

〔動向〕「二〇〇五年歴史学会回顧と展望 日本・近世 身分・差別」(『史学雑誌』第115編5号、118～120頁)

※現在に至るまで数回やった回顧と展望は、いずれも、身分や差別に関わるテーマで整理した。

〔目録〕福岡県立図書館郷土資料課編『平成十三年～十七年度 福岡県古文書調査報告書第十七集 京築地区神楽関

係史料調査』福岡県立図書館

〔発表〕「『世界』と『神国』——近世中期長崎町人・西川如見の自他認識——」九州史学創刊50周年記念事業・記

念論集企画関連研究会。九州史学研究会(九州大学、二〇〇六年六月三日)

※のちの活字化の際には、「天学」に注目する内容となった。

〔発表〕「武士神格化について」國學院大學 21世紀COEプログラム『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形

成』研究集会「近世の政治と祭祀・儀礼」(國學院大學、二〇〇六年六月二四日)

※武士神格化について、神道・国学研究の専門家から、批評いただいたのは有益であった。

〔講演〕「江戸時代の文書行政——対馬藩田代領関係史料を通して——」平成一七年度文化財成果展近世古文書の

世界・記念講演会(鳥栖市立図書館、二〇〇六年三月一八日)

※鳥栖市史編纂の仕事に基づくもので、とくに、対馬藩飛び地の田代代官所の文書行政のあり方に注目した。

これはアーカイブズの観点にも、自身としては繋がるものと思っており、のちに関わる統合新領域学府ライ

ブラリーサイエンス専攻でアーカイブズ学の教育に従事する際にも有益であったと感じる。

〔講演〕「近世の大名家と松崎藩」平成一八年度小郡市史講座(小郡市埋蔵文化財調査センター、二〇〇六年七月

一日)

〔講演〕「神になる武士たち」福岡市博物館部門別展示「神になる殿様」関連歴史学講座(福岡市博物館、二〇〇六

年八月二十七日)

〔関連〕「志」を抱かせてくれた授業、に多謝」(創立百三十周年記念誌編集委員会編『栄城創立百三十周年記念誌』佐賀県立佐賀西高等学校)

@「近世日本における武士像と道徳性と政治意識の相関性に関する史料復元的基礎研究」科研・基盤研究(C)(代表。二〇〇六～二〇〇九年度)

@「近世後期における地域ネットワークの形成と展開…日田広瀬家を中心に」科研・基盤研究(B)(分担。二〇〇六～二〇〇八年度)

【二〇〇七年】

〔史料集〕『佐賀県近世史料』第八編(思想・文化編)第三卷(責任編集、校訂、解題。佐賀県立図書館編刊、834頁)

※今次から佐賀県近世史料の責任編集をすることになり、解題執筆などを随時行う。佐賀県は小県ながら『佐賀県史料集成 古文書編』(全30巻)に続き、毎年、本シリーズを刊行しており(全40巻予定)、出身県ながらかかる歴史文化事業は大事なことと思う。

〔論文〕「江戸時代の武士のイメージ」(『歴史地理教育』71号、66～71頁)

〔論文〕「近世大名の農政展開と社会差別——小笠原小倉藩を素材に——」(『比較社会文化』第13巻、27～48頁)

※被差別民などを「社会差別」として、新たに捉えることを試みるが、これは現在の科研テーマの障害史研究の背景ともなっている。

〔論文〕「対馬藩田代領の扶持人と村役・町役——飛地領代官所役人の形成と性格——」(『地方史研究』329号、63～80頁)

〔論文〕「社会変容と訴願・改革・教諭——近世中後期対馬藩田代領の役人層と百姓——」(『九州文化史研究所紀

要」50号、1～37頁)

※以前、対馬藩を対象に「給人地主」というシェーマ化を行ったが、同藩飛び地における「扶持人」も、近世家臣団の一つのタイプを示すもの、というビジョンである。彼らは民に近い距離にあり、政治支配に一定の役割を果たす。上記二論文はこのような立場からの内容である。

〔論文〕「近世大名家（祖神）考——祖先信仰の政治化——」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊44号、65～75頁）

※大名家の先祖神が、体制の危機的な状況に際し、藩政改革の理念として政治的な機能を果たす見通しを示す。

〔論文〕「鍋島猫騷動——御家騷動の物語化と怪異性」（福田千鶴編『新選 御家騷動 下』新人物往來社、313～355頁）

※鍋島家の猫化け騷動を、私なりに本格的な研究対象としたものである。史実のフィクション化が、どのような経緯でなされるのか、という視角である。

〔書評〕「書評と紹介『青森県史 資料編 近世3 津軽2 後期津軽藩領』（『国史研究』〔弘前大学〕122号、60～62頁）

※執筆当時は、下北地域（八戸藩領）との歴史文化的な差異への留意が不十分であったと、反省しきりである。

〔講演〕「歴史への関心——鍋島をめぐるいくつかの素材から——」（平成一九年度第2回郷土研究講座（佐賀県立図書館、二〇〇七年七月二一日）

〔講演〕「平成一九年総合図書館古文書講座／江戸」（福岡市総合図書館文学文書課（同図書館、二〇〇七年九月一五日）

〔関連〕「二〇〇五年度学生生活・修学相談室活動報告 3 学生相談実施状況（2）」各学部・学府の取り組み 比較

社会文化学府」（『学生相談 九州大学学生生活・修学相談室紀要』8号）

〔関連〕「横山浩一先生の思い出」（横山浩一先生追悼文集刊行会編『横山浩一先生追悼文集』）

※横山浩一先生は九州文化史研究施設考古学部門の専任教員だった。私が助手をしていたころは、しばしば中州（福岡市繁華街）にも連れて行ってもらい、ご自宅で奥様の手料理をごちそうになったこともある。学生

の時、先生の講義は、車輪紋、刷毛目などの土器文様がどのように付けられたのか、という内容であったと記憶しており、門外漢ながら面白かった。この文章では、当時、副手をしていた藤尾慎一郎氏（現・国立歴史民俗博物館）と溝口孝司氏（現・九州大学比較社会文化研究院）のちよつとした諍いを、小心者の私が横山先生に相談した際、大局的立場から「ほっときなさい」といわれたことを記した。

二〇〇八年

〔共著〕『鳥栖市誌』中世・近世編（監修共著。鳥栖市誌編纂委員会編、佐賀県鳥栖市、792頁）

※佐賀藩領と田代藩領の違いをどのように叙述したらよいのか、近世関係の責任者として、頭を悩ました。

〔論文〕『土族反乱』の語り —— 近代国家と郷土のなかの『武士』像 ——（『九州史学』149号、36～53頁）

※鍋島猫騷動もそうだが、史実の語られ方に関心を持っており、いわゆる佐賀の乱について武士論の観点から叙したものである。このようなビジョンは、武士神格化のテーマにも通じている、と自身では思う。

〔論文〕「幕末期浦人の〈西洋〉認識と自己像 —— 福岡藩領『見聞略記』から考える ——」（『比較社会文化』第14巻、49～60頁）

※様々な国内情報を有し、玄界灘を航行する異国船も目にした博多湾西岸の福岡藩領浦人の記録から西洋認識などを解析しようとしたもの。思想家など知識人ではなく、一般の人びとの対外観がいかに形成されるのかは、現代社会、とりわけ世界的なパンデミックな状況における、他者像（様々なレベルでの感染者の流入など）を考えるに際しても、有効な視角だろう。

〔論文〕「外様大名領の東照宮 —— 鍋島佐賀藩領の場合 ——」（『九州文化史研究所紀要』51号、1～31頁）

〔論文〕「武士神格化と東照宮勧請」（『国史学』第195号、37～56頁）

〔論文〕「『世界』と『神国』 —— 西川如見の『天学』論をめぐる ——」（九州史学研究会編『境界とアイデンティ

テイ』岩田書院、231～261頁)

※二年前の発表の活字化である。これも、増穂残口の場合と同じように、私のマイノリティ階層への観点を反映させたものである。

〔小文〕「川村優先生の『歴史的後遺症』概念に接して」(『日本村落自治史料調査研究所 研究紀要』12号、26～27頁、二〇〇八年七月)

※川村優氏は旗本領研究を現在の千葉県域を中心にやられてきた方で、同じようなテーマ(知行制、領主制)に関心を持つ者として、後進である私も懇意にしていた。

〔小文〕「武功顕彰と『黒田二十四騎』」(『黒田長政と二十四騎 黒田武士の世界』同実行委員会編集・発行、8～10頁)〔小文〕「解題」(池田史郎先生著作集刊行会編『佐賀藩研究論攷 池田史郎著作集』出門堂、291～305頁)

※池田史郎氏は佐賀藩の様々な問題に論究されている。私がそれを主題別に編成し解題を付した。大園隆三郎氏(当時・佐賀県近世史料編纂室長)の依頼による。

〔小文〕「秀村選三先生からの〈学恩〉」——学士院賞・恩賜賞受賞への祝辞にかえて——」(『九州大学附属図書館付設記録資料館 ニューズレター』2巻、4～5頁)

〔発表〕「武士像管見 ——どのような眼差しが向けられていたのか——」九州歴史科学研究会例会四月例会(西南学院大学、二〇〇八年四月一二日)

〔発表〕「近世権力論ノート ——研究視角をめぐるスケッチ——」近世史フォーラム一〇月例会(大阪市立総合生涯学習センター、二〇〇八年一〇月一日)

〔発表〕「近世の「宗教」も政治・社会を読み解くカギ ——井上智勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会』2 国家権力と宗教」(吉川弘文館、二〇〇八年)に寄せて——」近世の宗教と社会研究会／歴史学研究会近世史部会合

同開催（学習院大学、二〇〇八年二月一日）

※『近世の宗教と社会』の合評会報告者の一人として発表した（2巻担当）。なお、1巻と3巻は横田冬彦氏・藪田貫氏などが担当。

〔講演〕「田代代官所と実務を支える人々」平成一九年度文化財成果展、記念講演会（鳥栖市立図書館、二〇〇八年三月一六日）

〔講演〕「鍋島騒動と『葉隠』」第四回福岡市史講演会「御家騒動と家臣団 —— 黒田武士の主従意識 ——」（福岡市立中央市民センター、二〇〇八年八月三〇日）

※福田千鶴氏の講演がメイン、私が比較の意味で当該テーマにて話題提供を行った。

〔講演〕「平成二〇年総合図書館古文書講座／江戸」福岡市総合図書館文学書課（同図書館、二〇〇八年九月二〇日）
二〇〇九年

〔単著〕『近世領主支配と地域社会』（校倉書房、444頁）

※単著三冊目にあたる。佐賀藩、対馬藩（本島・田代領）、小倉藩などが対象であるが、比較史という次元には至らなかった。ただし、地域社会の諸矛盾の析出やその意義づけなどは、多少行えたのではと思う。

〔論文〕「貝原益軒の「武」認識とその行方 —— 〈武功譜代〉像の形成をめぐる ——」（『比較社会文化』第15巻、27～39頁）

※泰平のなかの武士論の一つである。

〔小文〕「鍋島騒動と『葉隠』」（『市史研究ふくおか』第4号、12～18頁）

〔小文〕「『泰平』と規範」（九州大学比較社会文化学府『Cross over』26号、5～6頁）

〔小文〕「深谷さんからの〈贈り物〉」（『深谷克己近世史論集』第三巻、校倉書房、栞3、3～4頁）

〔小文〕「九州大学の古文書について・展示史料解題」(『九州大学所蔵の史資料シンポジウム・展示会 報告要旨・展示目録』九州史学会、九州大学法文学部85周年／文学部60周年記念事業、16～19頁)

〔書評〕「書評・小川和也著『牧民の思想 江戸の治者意識』平凡社」(『人民の歴史学』第180号、29～34頁)

※いわば、近世武家領主の民政思想という観点から、学ばせてもらった。

〔発表〕「座談会『近世大名展をつくる／みる』コメント」(九州史学研究会近世史部会、二〇〇九年九月一三日)

〔講演〕「対馬藩田代代官領の役人行政」平成二〇年度小郡歴史講座(古代体験館おごおり)(小郡市埋蔵文化財調査センター)、二〇〇九年一月三二日)

〔講演〕「『兵農分離』がもたらしたもの」第5回歴史学・歴史教育セミナー(九州大学伊都キャンパス、二〇〇九年八月二三日)

〔講演〕「御家騒動の物語化 ——鍋島猫騷動をめぐる——」平成二一年度飯塚市歴史資料館女性文化サークル講座(同歴史資料館、二〇〇九年八月二六日)

〔講演〕「平成二一年総合図書館古文書講座／江戸」福岡市総合図書館文学文書課(同図書館、二〇〇九年九月一九日)

〔講演〕「江戸時代の『生』 ——墮胎・間引の観点から——」福岡市立福岡中央特別支援学校校内人権研修会(同校、二〇〇九年十一月二〇日)

※本講演も障害史研究に繋がる問題意識で構成されている。

〔講演〕「近世の領主制と行政をめぐる ——『熊本藩の地域社会と行政』に学ぶ——」熊本大学文学部創立30周年・永青文庫研究センター設立記念／熊本大学文学部フォーラム(熊本大学文学部、二〇〇九年二月五日)

〔講演〕「九州大学所蔵の古文書について」公開シンポジウム「九州大学所蔵の史資料 ——過去・現在・未来——」九州大学文学部／九州史学会共催公開シンポジウム(九州大学附属中央図書館、二〇〇九年二月二二日)

〔報告書〕『近世日本における武士像と道徳性と政治意識の相関性に関する史料復元的基礎研究』（単著。平成一八）二一年度科学研究費補助金・基盤研究（C）・代表者高野信治、成果報告書、110頁）

※近世武士の政治意識、民政思想や、民による武士像、その実態や相関性などに関わる史料の収集に努めた。

〔史料集〕『佐賀県近世史料』第十編（宗教編）第一卷（責任編集、校訂、解題。佐賀県立図書館編刊、648頁）

〔論文〕「近世大名家臣の役割と人事——福岡藩黒田家を事例に——」（『九州文化史研究所紀要』52号、31～59頁）

〔論文〕「武士の昇進」（深谷克己・堀新編『江戸』の人と身分3 権威と上昇願望』吉川弘文館、65～91頁）

※この二論文は、いわば役人としての武士のあり方、とりわけ役割や人事という側面から考えた。

〔書評〕「書評と紹介・中川学著『近世の死と政治文化』吉川弘文館」（『日本歴史』740号、157～159頁）

〔小文〕「いのち」の共同性・社会性をめぐって——「誕生と死の歴史」シンポ参加記——」（『七隈史学』12号、65

～68頁）

※書評は、給人領主の「死をめぐる儀礼」について考えたことが契機で、依頼されたものである。後者の小文で取り上げた「いのち」、つまり「生」とともに、「死」の持つ意味、社会的な影響も、深い問題だろう。

〔小文〕「藩政史料——富士谷文書「立花家歴代藩主書状」——」（九州大学百年の宝物刊行委員会編『九州大学百年の宝物』丸善プラネット株式会社、164～165頁）

〔発表〕「コメント（三宅正浩「幕藩政治秩序の成立」）」日本史研究会大会・近世史部会（京都大学、二〇一〇年一

〇月九日）

〔講演〕「道徳性と障害者観——江戸時代を素材に——」福岡市立生の松原特別支援学校人権教育研修会（同校、二

〇一〇年七月二八日）

※道徳と障害認識の関連は、現在に至るも大事な問題と考える。

〔講演〕「平成二二年総合図書館古文書講座／江戸」福岡市総合図書館文学文書課（同図書館、二〇一〇年九月一八日）

〔講演〕「桜井神社の〈秘話〉——黒田騒動・長崎警備・国学拠点——」平成二二年度九州大学公開講座「伊都学」

西区・糸島地域の歴史発掘（西部地域交流センター）「さいとびあ」、二〇一〇年一〇月二〇日）

@「近世日本における政治意識と福祉観念の相関性に関する基礎的研究」科研・基盤研究（C）（代表。二〇一〇～二〇一三年度）

二〇一二年

〔史料集〕「新修福岡市史 資料編近世Ⅰ 領主と藩政」（共同校訂、共同解題執筆。福岡市史編集委員会編、福岡市、995頁）

〔論文〕「領主結集と幕藩制——三宅正浩報告「幕藩政治秩序の成立」に接して——」（『日本史研究』582号、84～91頁）

〔論文〕「もう一つの「名利」——「奉公人」の「立身」……『葉隠』の葛藤——」（『九州文化史研究所紀要』54号、1～31頁）

〔小文〕「近世大名展をめぐる思い」（『九州史学』158号、52～55頁）

〔書評〕「書評・モリス、J. F. 著『近世武士の「公」と「私』』清文堂出版」（『歴史学研究』877号、44～47頁）

※モリス、J. F. 氏と同じく知行制に関心を持つ立場から、依頼されたものである。「公」と「私」という、前近代では切り分けが難しい、しかし重要な観点から、仙台藩家臣の史料を一貫し見つけた仕事で、関心のありどころが私と違い、学び大である。

〔発表〕「〔障害者〕への眼差し——近世日本の人間観という観点から——」近世史フォーラム一一月例会（九州大

学西新プラザ、二〇一一年一月一三日)

※この発表が終わって間もなくして、重篤な病氣罹患が判明した。発表の論文化には、手術入院した勤務校附属病院(九大病院)に資史料を妻に運んでもらって荒原稿を書いた。この病罹患も障害史研究を志す大きな契機となった。ただ、翌年は仕事の成果はなく、その後の入退院の繰り返しもあり、いわば仕事のこなしがもともと遅いのに、さらに遅くなった。

@ 四月、大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻担当(修士課程専任教員)

@ 「被差別民衆史・研究方法論」科研・基盤研究(B)(分担。二〇一一～二〇一五年度)

二〇一三年

〔共編著〕『幕藩体制と「名君」たち』(責任編集。週刊朝日百科日本の歴史7、朝日新聞出版、39頁)

〔小文〕「外様」「大名家の家臣」(深谷克己・須田努編『近世人の事典』東京堂出版、78～81頁、83～86頁)

〔書評〕「書評・笠谷和比古著『武家政治の源流と展開』——近世武家社会研究論考——」吉川弘文館(『日本史研

究』605号、80～87頁)

※この年も仕事らしいものは残せなかったが、上記の責任編集本や書評は勉強になった。

二〇一四年

〔単著〕『大名の相貌——時代性とイメージ化——』(士の系譜1、清文堂出版、274頁)

※体調があまり良好ではないなか、書きためたものを早めにまとめておくことを真剣に考えた。本書はその一冊である。

〔史料集〕『新修福岡市史 資料編近世2 家臣とくらし』(責任編集、校訂・解題。福岡市史編集委員会編、福岡市、1100頁)

※武士・家臣のあり方をめぐり、生活者としての「くらし」をコンセプトに、史料選択したものである。

〔論文〕「近世の武士と知行」(『九州文化史研究所紀要』57号、1～25頁)

〔論文〕「大名と藩」(大津透他編『岩波講座 日本歴史』第11巻、岩波書店、37～70頁)

※「大名」と「藩」をあえて区別することで、見えてくるものがある主題と考える。本論は近代にいたり「藩」と「天皇」が、勤皇意識を軸に結びついていた可能性も指摘した。

〔講演〕「記録を残す家臣たち —— 奉公人そして生活者として ——」福岡市史・資料編近世2刊行記念講演会「黒

田家臣の実像に迫る」(福岡市博物館、二〇一四年一月八日)

〔講演〕「『異域』としての糸島 —— 領域・宗教・情報の観点から ——」二〇一四年度九州大学公開講座「伊都学」

西区・糸島地域の歴史発掘(西部地域交流センター「さいとぴあ」、二〇一四年一月一九日)

二〇一五年

〔単著〕『武士の奉公 本音と建前 —— 江戸時代の出世と処世術 ——』(歴史文化ライブラリー393、吉川弘文館、224頁)

①本書も入院退院を挟んでの執筆(前年)となり、編集者の方からは、入院患者(九大病院)が主にとのよう
な本に関心があるのか、注視してもらえれば、などの話しも頂戴した。もともと、歴史物は今一つの印象で、
私自身も歴史物ではなく、松本清張作品数編を読む塩梅だった。

〔共著〕『新編大村市史』第三巻近世編(大村市史編さん委員会編、長崎県大村市、175～211頁)

〔論文〕「〈障害者〉への眼差し」(荒武賢一朗他編『日本史学のフロンティア2』法政大学出版局、107～141頁)

※先述のように、入院しながら荒原稿を書いたもので、今から思えば、肩肘張り、また欲張った内容である。
しかし、私にとり初めての障害関連論文で、これまでに考えてきたこと、また今後考えるべきことが、それ
なりに網羅された印象である。今後は一つ一つの問題を掘り下げることが必要だろう。なお、本論文を差し

上げた川添昭二先生からは、電話をすぐにいただき、大変重要なテーマとの励ましをうけた。またクリスチャーの秀村選三先生からは、障害者の親は選ばれた人々との一文を紹介された。両先生には、現代的問題で微妙な要素も持つ障害の歴史研究を志す覚悟を抱く契機を与えて下さった思いであった。

〔論文〕「藩領社会の人々とくらし —— 大村藩『郷村記』の分析を中心に ——」（『九州文化史研究所紀要』58号、81頁）

※病氣罹患したことで、もともと関心があった生活者としての人びとのくらし、という観点をより意識するようになった。

〔小文〕「江戸幕府と藩 —— 將軍への結集と共存する大名の自立 ——」（歴史科学協議会編『歴史の「常識」をよむ』東京大学出版会、124頁～127頁）

〔小文〕「『月影兵庫・花山大吉』時代の武士たち」（『本郷』116号、30頁～32頁）

〔小文〕「平和な時代の『武』」（『武道』（日本武道館）585号、28頁～31頁）

〔書評〕「書評・野尻泰弘著『近世日本の支配構造と藩地域』吉川弘文館」（『日本史研究』633号、54頁～61頁）

〔書評〕「書評と紹介・白川部達夫『旗本知行と石高制』岩田書院」（『日本歴史』802号、99頁～101頁）

〔書評〕「書評・三宅正浩著『近世大名家の政治秩序』校倉書房」（『歴史学研究』936号、47頁～50頁）

※これらの書評は、病氣罹患者としてはいささかしんどかったが、むしろ病気を忘れ気力を高める起爆剤になるの思いで、うけてきた。

〔動向〕「二〇一五年度歴史学研究会大会報告批判・近世史部会」（『歴史学研究』939号、39頁～41頁）

〔講演〕「藩政と領民 —— アイデンティティと差異化の視点を軸に ——」（二〇一五年度加賀藩研究ネットワーク大

会（金沢大学サテライト・プラザ、二〇一五年十一月二日）

※主題からは想像つかない、障害を含む差別問題も組み込んだもので、響蹙（ひんしゆく）をかったかも知れないが、古くて新しい主題として、受け入れてもらえた部分もあろうかと思う。

@「近世日本の障害者と人間観に関する基礎的研究」科研・基盤研究（C）（代表。二〇一五～二〇一八年度）
二〇一六年

〔史料集〕『佐賀県近世史料』第十編（宗教編）第四卷（責任編集、校訂、解題。佐賀県立図書館編刊、104頁）

〔小文〕「特別寄稿 『葉隠』の葛藤 —— 武士の「忠」とその行方 ——」佐賀県立佐賀城本丸歴史館編『葉隠と忠臣蔵』天下泰平の武士道「展示図録」同館、36～39頁）

〔小文〕「公開講演録」藩政と領民 —— アイデンティティと差異化の視点を軸に ——」（『加賀藩研究』6号、9～19頁）

〔書評〕「新刊紹介 野口朋隆著『佐賀藩鍋島家の本分家』佐賀大学地域史料学センター」（『学苑』〔昭和女子大学〕910号、76～77頁）

〔講演〕「『葉隠』の葛藤 —— 武士の「忠」とその行方 ——」葉隠成立300年記念特別展「葉隠と忠臣蔵…天下泰平の武士道」講演会（佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一六年一月二五日）

※谷口眞子氏の葉隠と忠臣蔵の講演がメインで、私は文字通り、付けたり、であったが、忠臣蔵とのコラボは、私を含めた佐賀の方には、新鮮であったと思う。

〔講演〕「糸島の江戸期記録を読む —— 地域・日本・世界への関心 ——」二〇一六年度九州大学公開講座「伊都学」西区・糸島地域の歴史発掘（西部地域交流センター「さいとびあ」、二〇一六年二月一日）

※現在、「九州文化史資料部門」（旧九州文化史研究施設、旧九州文化史研究所）も所在する九大伊都キャンパスの地域特性を、浮かび上がらせる意図での話しであり、関心を持って聞いていただいたのではと思う。

〔原著〕『近世政治社会への視座——〔批評〕で編む秩序・武士・地域・宗教論——』（清文堂出版、305頁）

※これまでの書評類を軸にまとめた成果である。病氣罹患後にやはりまとめておきたいという思いからだが、この頃は随分と体調も回復してきた。

〔共著〕『新編大村市史』第五巻現代・民俗編（大村市史編さん委員会編、長崎県大村市、611～620頁）

〔史料集〕『佐賀県近世史料』第十編（宗教編）第五巻（責任編集、校訂・解題。佐賀県立図書館編刊、914頁）

〔論文〕「近世領主財政への一視角——大名財政の公的性格をめぐって——」（『日本史研究』664号、3～30頁）

※江戸期の領主財政はどこまで民政を視野に執行されるのか、を主題にしたもので、「家」相続を主眼とする（支出が多額な参勤交代、江戸費用もこれに該当しよう）領主財政には、その傾向が限定的であったのではないのか、という内容である。これは当然、近世の年貢の性格（地代か税か）にも及ぶ問題である。この先の私の論点は、貧窮者、またそのなかに含まれる障害者、病者の救済志向を、領主はいかに持ち得たのかである。

〔論文〕「近世辞書『俚言集覽』にみえる〈障害〉表現——類型・認識の析出——」（『九州文化史研究所紀要』60号、55～88頁）

※本論文は、障害概念を、なるべく広角の視野から捉えたいという意図を持つ。

〔発表〕「近世領主財政への一視角——大名財政の公的性格をめぐって——」（日本史研究会二〇一七年度五月例会

（京都大学文学部、二〇一七年五月二三日）

〔講演〕「江戸武士の二つの顔 戦士と役人」平成二九年度今治城特別展「今治藩の家臣団」関連企画講演会（今治

市吹揚神社寿殿、二〇一七年一〇月二二日）

二〇一八年

〔単著〕『武士人格化の研究』（吉川弘文館、研究篇288頁、資料篇510頁）

※これも、病氣罹患を機に、まとめておくべきとの思いから刊行したが、祭神収集（資料篇）、またそれに基づく分析（研究篇）も、不十分である。拙速の感がないわけではない。

〔論文〕「近世仏教説話にみる〈障害〉」（『九州文化史研究所紀要』61号、55～103頁）

※仏教と障害認識の関係は、先学の諸成果から古代中世に強かったと考えられるが、近世にも相応の仏教的な影響がみえ、むしろこの点を、いかに評価するのか。

〔論文〕「民」の選別と救済 —— 近世領主の権力基盤 ——（『歴史学研究』97号、11～21頁）

※本論文も標題には出ないが、マイノリティ、すなわち乞食、非人などの被差別民、そのなかに多く含まれるだろう障害者、病者を視野に入れ、近世の武家領主権力に「民」の選別の観点があった可能性を指摘する。

〔小文〕「〈障害〉の歴史性を考える」（『日本歴史』838号、37～39頁）

〔書評〕「書評・荒木裕行著『近世中後期の藩と幕府』東京大学出版会」（『史学雑誌』127編8号、76～84頁）

〔書評〕「書評・尾脇秀和著『刀の明治維新』吉川弘文館」（『しんぶん 赤旗』二〇一八年一月二一日）

〔発表〕「近世「糸島」のグローカル性 —— 地域・日本・世界への関心 ——」（二〇一八年度九州史学会大会シンポジウム「史的環境としての糸島地域」（九州大学伊都キャンパス、二〇一八年二月八日）

〔講演〕「江戸時代の空間図像にみえる〈世界〉観 —— 宇宙図・世界図・人体図 ——」（朝日カルチャー連携講座

「さまざまな地図を科学する」Ⅱ、二〇一八年九月一日）

※江戸時代の人びとの「世界」観をめぐり、宇宙観、地理的な世界観、また人体内部のイメージ、という三つの局面から話し、その相関についても私なりに言及した。

〔講演〕「神になった武士」二〇一八年度九州史学研究会大会公開講演（九州大学西新プラザ、二〇一八年一〇月二〇日）

〔講演〕「江戸時代の高齢者・病者・障害者」糸島の歴史・文化と福祉を次世代に繋ぐためのシンポジウム、糸島の歴史と文化を考える会（伊都文化会館多目的ホール、二〇一八年一月四日）

※これは丸山雍成先生の依頼で話しをしたものである。私が関心持つテーマに共感いただいた所以と思うが、高齢者・病者・障害者のそれぞれの固有の問題と関係は、これから考察を深めるべきで、新たな課題を与えていただいたと感じる。

〔講演〕「近世「糸島」の地域的特性——領域・宗教・情報の観点から——」二〇一八年度九州大学公開講座「伊都学」西区・糸島地域の歴史発掘（西部地域交流センター）「さいとぴあ」、二〇一八年一月二八日）

二〇一九年

〔論文〕「病傷治癒信仰のなかの武士——〈治癒神〉という見方——」（『九州文化史研究所紀要』62号、1～36頁）

※治癒神という関心も、私の病氣罹患から来ている。

〔論文〕「神になった武士」（『九州史学』184号、28～37頁）

〔発表〕「近世日本の国家・社会と〈障害者〉」歴史科学協議会第53回（全体テーマ「変貌する国家と個人・地域」）報告（明治大学駿河台キャンパス、二〇一九年二月一日）

〔講演〕「歴史に見る家族の姿」家族歴史フェア二〇一九（末日聖徒イエス・キリスト教会・福岡ワード、二〇一九年四月二〇日）

@ 四月、統合新領域学府副学府長、同大学院ライブラリーサイエンス専攻長（翌年三月まで）

@ 「障害の歴史性に関する学際統合研究——比較史的な日本観察——」科研・基盤研究（A）（代表。二〇一

九〇二〇二二年度

【二〇二〇年】

〔論文〕「近世日本の国家・社会と〈障害者〉」〔歴史評論〕842号、45～56頁）

〔論文〕「〈障害者〉とその行方——地方（じかた）記録による実態研究の試み——」〔障害史研究〕1号、35～50頁）

※上記二論文は何れも、和歌山藩田辺領を素材としたものである。本地域には町方の記録史料が長い時間軸で残されており、これに基づく解析である。前者は主に障害者に対する政策面、後者は障害者の実態面、の内容である。

〔論文〕「障害関連のデータ集〔1〕——「耳囊」記事からの採録——」〔障害史研究〕1号、81～106頁）

※このような近世の「随筆」類からのデータ収集の可能性は大と考えるが、果てせてない。

【二〇二一年】

〔論文〕「武家夫婦の日記と病氣記録——広島藩儒者頼春水・静子の〈障害〉認識を考える——」〔障害史研究〕2号、63～77頁）

※夫婦揃って日記が残る事例は稀少だろうが、ここでは広島藩儒者の頼春水夫妻の日記を対象に、その子供で『日本外史』などの著作にて著名な頼山陽に対する両親の思いを析出した。とくに妻・静子の日記には、子供などの家族の病気の記録が克明である。山陽に対し、両親は知り合いの医者などの見立てもあって「狂児」の認識を共有しており、廃嫡にした。いわば精神障害の可能性が見て取れる。

〔小文〕「奉公への思いと人事の難しさ」（開館二十周年記念特別展『上杉鷹山の世界——藩政改革と家臣団——』

米沢市上杉博物館、97～100頁）

〔発表〕「近世日本における〈障害〉認識の形成と社会観」東北アジア研究センター 25周年記念国際シンポジウム

セッションB1「近世日本における知識人と社会思想」での報告（東北大学・東北アジア研究センター、オンライン開催、二〇二一年六月二七日）

〔発表〕「障害認識を遡る」日本史研究会主催「第9回 歴史から現在を考える集い」（平安女学院大学京都キャンパス、二〇二一年八月二八日、対面開催中止）

〔講演〕「大名家臣団の『奉公』とは何か」「上杉博物館特別展・上杉鷹山の生涯…藩政改革と家臣団」（米沢市上杉博物館、オンライン開催、二〇二一年六月六日）

二〇二三年

〔单著〕『神になった武士——平将門から西郷隆盛まで——』（歴史文化ライブラリー546、吉川弘文館、358頁）

※武士の神格化をめぐり、生き続ける武士の記憶、というモチーフで、先著『武士神格化の研究』の武士祭神の統計化をもとに、啓蒙的な文脈で論じた。

〔論文〕「近世日本の社会観と〈障害〉認識——石門心学をめぐる——」（『障害史研究』3号、1～16頁）

※前年の東北大学でのシンポ報告をもとに論文化した。石門心学を社会思想と捉える考え方は是非もあるが、そのなかに障害認識を読み込む先学の仕事は管見の限り見いだし得ない。テーマが微妙、という認識だろうが、科研の研究誌に記した。

〔論文〕「石門心学道話にみる〈障害〉の比喩化——狂言台本の題材化との比較——」（『九州文化史研究所紀要』65号、1～35頁）

※前出論文と関わるが、石門心学のテキスト類には多くの障害者をめぐる比喩が載る。室町期の狂言での障害者の題材化が主に笑いを主題にするのに対し、石門心学では人の資質を教諭する比喩、という性格があることを、比較の観点から提示する。

〔論文〕「夫婦の日記——広島藩儒者頼春水と妻梅颯が綴る生活記録——」（福田千鶴・藤實久美子編『近世日記の世界』ミネルヴァ書房、284～292頁）

※江戸時代、夫婦揃って日記を記す事例は少ないと思われ、ましてやその現存は稀有だろう。標題にある夫婦の日記を生活とジェンダーの観点から史料論的に検証した。

〔書評〕「書評・平野克弥著、本橋哲也訳『江戸遊民の擾乱』岩波書店」（『図書新聞』353号、二〇二二年二月一九日）
※本書は、法学・政治学を専攻する著者の学位論文だが、私に関心を持つマイノリティにもつながる「遊民」の存在を組み入れた歴史像の構築を企図し、啓発は大であった。

〔書評〕「書評 野村禎司著『近世旗本領支配と家臣団』吉川弘文館」（『歴史学研究』1020号、43～46頁）
※領主と幕府官僚という二つの側面を持つ旗本を対象にした「近世的領主」論だが、何をもって近世的領主といえるのか。私の研究主題の一つでもあり、やはり悩ましい。

改めて自身のこれまでの仕事を追うと、いかに狭小なことしかやれなかつたかを思い知らされる。教科書に載るようなことが王道の分野とすれば、いわば周縁的な事象に終始した。近世武士論としては劣勢な知行制・領主制、東照大権現と比べるとローカルな武士神格、マジヨリテイから社会差別された障害者・被差別民、などはその象徴だろう。ただし周縁的と考えられている存在への留意は、歴史の深部と総体をみるうえで必要なこととも思う。

自身の「仕事の足跡」はやがて掻き消えようが、歴史研究のささやかなりとも礎になればと思う。そしてこれまで支えて下さった多くの方々に御礼を申し上げるとともに、拙い仕事を発表する場を提供し続けてくれた『九州文化史研究所紀要』には心より感謝申し上げます。